

修士論文(要旨)  
2012年1月

二言語話者同士のコミュニケーションにみられるコードスイッチング  
ー日本語母語話者・韓国語母語話者の接触場面を中心にー

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科  
日本語教育専攻  
210J3003  
金貞美

## 目次

<b>第1章 はじめに</b>	
1.1 研究背景	1
1.2 研究目的	2
<b>第2章 先行研究</b>	
2.1 日本語と韓国語のCSに関する研究	4
2.2 CSの機能に関する研究	6
2.3 コミュニケーション・ストラテジーとしてのCS	8
<b>第3章 用語の定義</b>	
3.1 CS・借用・混用の定義	12
3.2 本研究のCSの定義	13
3.3 日本語・韓国語の接触場面における参加者の関係	13
<b>第4章 予備調査概要</b>	
4.1 調査方法と調査協力者	16
4.2 予備調査の結果	16
4.3 本調査への課題	17
<b>第5章 本調査概要と分析方法</b>	
5.1 調査協力者	19
5.2 調査方法	20
5.3 分析方法	22
<b>第6章 分析—学生同士のコミュニケーションにみられるCS</b>	
6.1 談話関連CS	24
6.2 参加者関連CS	31
6.3 参加者の関係構築を助けるCS	33
6.4 まとめ	35
<b>第7章 分析—社会人同士のコミュニケーションにみられるCS</b>	
7.1 談話関連CS	36
7.2 参加者関連CS	53
7.3 参加者の関係構築を助けるCS	64
7.4 まとめ	66
<b>第8章 総合的考察</b>	
8.1 学生と社会人の各接触場面におけるCSの機能分類のまとめ	68
8.2 学生同士のコミュニケーションから捉えられたCS	69
8.3 社会人同士のコミュニケーションから捉えられたCS	74
<b>第9章 おわりに</b>	
9.1 本研究のまとめ	82
9.2 今後の課題	84
<b>参考文献</b>	
<b>券末資料</b>	
<b>謝辞</b>	

現在日本では、日本語母語話者と韓国語母語話者の交流を目的としたコミュニケーションの機会が増えている。本研究では、こうした日本語母語話者と韓国語母語話者が意思疎通をするためのコミュニケーション・ストラテジーとして、日本語・韓国語のコードスイッチング(以下、CS)を行っているという認識の下、CSの助けによりどのようにコミュニケーションを構築しているのかを観察し、CSの働きを探ることを目的とする。

本研究では、「日本語母語話者－非母語話者」の関係ではなく、日本語と韓国語の両言語の会話レベルがほぼ同等である日本語母語話者と韓国語母語話者を対象とする。彼らが参加する場面(以下、二言語接触場面)をさらに、学生と社会人という異なる属性で分け、それぞれの接触場面ごとにCSの機能を分析した。まず、CSがどのように二言語接触場面で働いているのかという観点から、「談話関連CS」、「参加者関連CS」、「参加者の関係構築を助けるCS」に分けてCSの機能を分析し、その機能が参加者同士の目標言語使用に対する意識に及ぼす影響を探った。

その結果、まず、学生同士のCSは、主として単語の補償的機能としてしか使用されていないことがわかった。しかし、わずかながら他にも相互作用に関わる機能が見られ、多様な観点からCSに注目する必要があることが示唆された(研究課題1)。主に日本語で会話を行っている学生同士のCSの使用には、「生活言語」と「留学経験」が影響を与えており、特に「留学経験」により、日本語母語話者は目標言語への配慮、韓国語母語話者は目標言語習得という異なる意識が日本語による言語使用となっていることがわかった(研究課題3)。

次に、社会人同士のCSとしては、単語のみでなく、様々な文へのCSが見られ、その働きも補償的機能に止まらず、3つの観点から多様な機能が見出された(研究課題2)。社会人同士のCSの使用には、「言語使用機会の維持」、「社交手段」が影響していることがわかった。彼らの職場場面での会話の影響か「正確な意思伝達」という意識を参加者が持っており、これにより内容や意思伝達を中心に、お互いに目標言語使用を肯定的に捉えたやりとりを行っていることが示された(研究課題4)。

また、学生同士と社会人同士の談話の中でみられたCSによる笑いは、談話をスムーズに進めるため使用され、参加者の関係構築にも貢献していたと考える。

これらの研究の結果から、学生と社会人という異なる場面がCSの使用に影響を与えることが明らかになった。学生同士と社会人同士で、それぞれ異なる結果が出たが、参加者同士は、会話の意思疎通のため、相互行為、相互理解を求めながらコミュニケーションを進めていくことがわかった。CSの多様な働きを探るためには、二言語接触場面への対象者の背景や属性への考慮や、CSの役割の観点をより広げ、多様な分析視点を採り入れる必要があることが示唆された。

## 参考文献

- Auer, P. (2000) A conversation analytic approach to code-switching and transfer, In L. Wei(ED.) *The Bilingualism Reader*, London: Routledge, 261–279
- 宇佐美まゆみ (2007) 『改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System For Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版』  
(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj070331.pdf>)
- 郭銀心 (2005) 「帰国子女のコード・スイッチングの特徴－在日1世と韓国人留学生との比較を中心に－」『在日コリアンの言語相』和泉選書 pp.159–193
- Gumperz, John (1982) *Discourse Strategies*, Cambridge: Cambridge University Press (井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞未・多々良直弘(訳) 2004『認知と相互行為の社会言語学』) 松栢社
- ザトラウスキー・ポリー (1994) 「インターアクションの社会言語学」『日本語教育』13号 pp.40–51
- ザトラウスキー・ポリー (1998) 『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－』くろしお出版
- 田崎敦子 (2005) 「日本人学生と留学生による英語ベースのグループワークにおける日本語へのコードスイッチングの機能」『言語文化と日本語教育』29号 pp.92–95
- 田崎敦子 (2006) 「コードスイッチング研究の概観－多言語社会のコミュニケーション分析に向けて－」『日本文化と日本語教育』増刊特集号 pp.54–84
- 田崎敦子 (2007) 「接触場面のコードスイッチングが参加者に与える影響－多言語を背景にした大学院生のグループディスカッションを対象に－」『異文化コミュニケーション研究』第19号 pp.85–99
- 都恩珍 (2000) 「日本語－韓国語バイリンガルによるコード切り替え－在日コリアン3世を通して－」日本学報第45巻 pp.19–32
- 中谷潤子 (2006) 「インドネシア華人の談話にみられるコードスイッチング－参加者の立場設定に注目して－」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第10号 pp.21–41
- ナカミズ・エレン (2003) 「コード切り替えを引き起こすのは何か」『月刊言語』32(6) 大修館書店 pp.53–61
- ネウストプニー, J.V. (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45号 日本語教育学会 pp.30–40
- 服部圭子 (2001) 「接触場面における日本語非母語話者のコードスイッチング－機能を中心に－」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第5号 pp.39–58
- ファン・サウクエン (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」『日本語教育の新たな文脈－学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性－』国立国語研究所編 アルク pp.120–141
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 宮副ウォン裕子 (2005) 「多言語職場の会話上の役割交渉」『日本語教育学会春秋大会予稿集』 pp.195–200

